

無双直伝英信流兵法
(政岡壱實範士九段)

・斬ると言う事

刀は切る為に出来ているものであるが、その使用する場所、目的、使用する人の腕前、力の大小によって最も適当なものが必要であって、斬る事が最も効果的に、長い体験と工夫によって完成されたものである。

古来武士は之を魂と考え、また作者も全身全霊を打ち込んで作ったもので、まことに見事なものが出来上がっていることは周知の通りである。

これを使用する面から見ると刀身の大小長短、軽重によってこれにふさわしい柄の大小、長短があり、これに配するに大きさ、厚さ、重さ等にまで最新の工夫が施された鐙があり、尚柄の中に隠された中心の大小長短は言うに及ばず。左右の握りの大小にまで考慮が加えられており、その一部を取り替えても調子が変わるほどの綿密さである。

これについて、昭和44年四国居合道研究会今治市で開かれたとき、私の持参した刀の鐙が大きなものに取り替えてあった。「少し手元が重いな」と思いつつ抜いて帰ったのである。処が4、5日後門人が「先生の居合がちょっと変わりましたな」と、私は喜び驚きました。実は手元が一寸重いので剣尖の力が足りなかった事を反省していたところを突かれたのです。これを見破った弟子の力量を喜ぶと共に刀は生き物であると驚いた次第である。尚切るも着て器物についても重ねの厚いもの、薄いもの、身幅の広いもの、薄いもの蛤刃のものまでが案出されているのである。

この刀をもって試し切りを行ってみると、右からの斜め義理が一番斬り易く、次は左からの斜め斬りで真上からが最も切り難い。これは右からの斜め斬りは、右手が前へ出ている為に振り下ろすに極めて自然である事と、一般には右手は左手より強い関係である。これに反して左よりの斜め斬りは手の働きが不自然であるから切りにくい。然るに真上から斬ったより斬り易い。これは刀が物に当たったときの抵抗の関係で、直角斬りと斜め斬りとは自然に切れ味の異なるもの、即ち刀を鋭く使用するか否かに関係するのである。

真上からの斬り下ろしが最も斬り難いのは抵抗の関係に加えて左右の均衡を欠き易いからで、刃筋は左に向きがちであるから特に左手を強く握り締める必要がある。昔から左利きは良く斬れると言われている。

尚引き斬り、押し切りがよく切れることは周知の通りであるが、これは刀の動きによって刃の鋭さを増加するで、剃刀の刃と鉋の刃との違いである。この意味から薄刃で斜めに引き斬り・押し斬り最も斬れるのであるが強さと言う点になると厚い刃でなければならない事は蛤刃の生まれた所以である。

以上はよく斬れると言う点について述べたが、斬る力という点について考えてみると、その目的物に相応しい強さ、鋭さのある刀であると同時に物に当る力即ち刀の運動の大小

に依って加速度と腕力、全身の力、手の内の冴え、左右の力の均衡と刀の重量によって左右される。

この意味において、据え物斬りに当っては長い柄と重い鉛の鍔まで使用し背伸びをして振り上げ、膝を曲げて斬り下ろしたものである。

寛文7年平石右衛門吉より岩室甚太夫に伝えた「据物之巻」によると

鍔之事の条に

- イ 壹尺壹寸より壹尺六寸までは壹百五拾目～貳百目
- ロ 壹尺六寸より二尺までの脇指には八拾目～壹百目、壹百貳拾目也但し鉛鍔嫌いの方常の指量の如くたるべき事

切柄柄寸法之事の条に

- イ 九寸五分より壹尺九寸までは長さ壹尺四寸太さ小口にて刃方へ壹尺四寸ひらの方へ厚さ九分
- ロ 壹尺六寸より貳尺までは長さ壹尺三寸太さ同断
- ハ 貳尺より貳尺五寸までは長さ壹尺二寸太さ同断
- ニ 貳尺五寸より三尺までは長さ九寸五分太さ同断

二ッ胴之事の条に

- イ 鍔の重さ刀は五百目、六百目きり手の力によりて壹貫までも苦しからず
- ロ 脇指の鍔重さ七百目、八百目、壹貫目までも切手次第の事
- ハ 柄常の如し

三ッ胴之事の条に

- イ 鍔壹貫五百目にても其の身次第

四ッ胴之事の条に

- イ 鍔三貫目其れ以上にても力次第

とあって刀の重さ長さは斬る人の力に重大な関係があるのである。

我が英信流の抜き付けは殆ど一文字であり、切り下ろしも特別の場合を除いては真下に斬る。即ち十文字の居合であるがこれは斜め斬りは素人でも出来るから切り難い斬り方を身に付けておけば、いざという時は自由に変化して斬り得るとの考え方から出たものと教えられている。これは剣道練習に当って面、手首、振り上げたときの胴、面垂れの突きを練習しておけば実戦には斜面でも袈裟切りに腕諸共斬り、胸、腹を突いても目的は達せられると同様である。古い覚書に、「真剣の場合は斯様に振舞え、平常の稽古の格には斯様にせよ」とはっきり示した業がある。

尚押し切り、引き切りに付いてよく斬らねばならぬから、押し斬り引き切りをすべきであると説き、これを実行に移して体勢を整えてから間延びした居合を抜く者を見受けるが、居合はお互い動いているときに斬るのであるから自然に押し切り引き切りになるもので、この考慮をなくして斬ったときの体勢が安定し、次の動作が芽生えているよう心がくべきである。居合の命は先であり、なるべく遠間から踏み込んで斬る修練を身につけておけば、

近間の業は自然に出来るものである。

秘伝書に「右肩を敵にぶつけて切れ」とか「我が身を土壇と心得て斬れ」と教えているところを見ると、真剣の場合はなかなか踏み込めなかったものと察せられる。

・大小差して居合を抜いては

在る時剣道居合道教士七段の知人から来信「居合のとき小刀を差して出ても差し支えないでしょうか」との質問。

小刀は斯様に差し、大刀は斯様に差すべきと教えられ、又教えてきたが、迂闊にも大小差して居合を抜くことなど念頭になかったのですが、直ちに大小を差して抜いて見ましたが邪魔にならない。その後はなるべく小刀も差しやっています。

秘伝書には大小差違といった差し方があり、小刀の柄が邪魔にならない工夫がされています。

さて、平常の稽古は兎も角、正式に紋付袴という時には当然差すべきでないでしょうか。古い記録によると君主の前などでは業、身分、氏名、例えば英信流の内「大森流」或いは太刀打ちの位と動作を書き、何某門人、何某長男と身分を書いたものを提出の上、袴着用の上、演武したものである。袴着用となれば小刀は当然差していたものと考えられる。

平常の稽古着袴の場合は大なり小なりだけの形、居合でしかるべきでしょうが、いざ御前に入る紋服着用となれば公式であるから小刀も除くことは出来なかったと思われる。

流祖の居合を始めた時代は兎も角として、剣道の諸流派の完成した剣道居合が現存し、それを現代我々が学ぶとする時、(明治期は特別として)徳川300年は二刀の時代であり、その時代を受け継ぐべく当然小刀を帯する事もまた必要である。

剣道においても昔は形剣道であったものが、竹刀打剣道と同時に行われる事となり、現代の剣道は専ら竹刀打剣道となり、昔あった各流派の形は無視され10本の剣道形に統一され、その上儀式としてのものと審査のときのみに行われるなっているが、この形も徳川時代の「しきたり」に従うべきと考えるとき、表立った場所での居合、形共に小刀も差して行うべしと考えられる。現代の剣道形の時、最初から2本差して行えば途中で抜きかえるだけで、のこのこ歩いて取替えに行き、打太刀が躊躇して待つ必要もなくなり、時には途中であるにもかかわらず拍手が起こる等の事もなく自然に行われるのではないかと愚考する次第で、現代の形を作った先生方のお考えを伺いたいと思うが故人で致し方ない。

私は形の時も2本差しでやってみますが、少しも邪魔にならない事に自然であるように思われます。これは現代剣道形における納刀法が土佐に伝わっている英信流と一致するからだと考えます。

英信流は明治頃まで門外不出否県外不出のもので2派ありましたが、明治末期から県外に流出してかなり変わった形が生まれて来ています。現在土佐に残っている十文字の居合

即ち上から納める事は、七代長谷川英信という大武道家が、二刀差した時代に適応する様、
身体を容れ得るだけの狭い場所でも、納刀出来る様に工夫されたもので、納刀に当って
小刀が邪魔にならないように出来ています。

伯キ流居合は英信流と兄弟流であります。流祖の時代の其のままの横からの納刀法で
あるよう見受けています。当時は左手を前へ出すことなく納めていたものが、二刀を差す
時代になると、小刀が邪魔になるので、鯉口を前へ突き出して納めるようになったものと
考えられます。

英信流で横からしかも鯉口も前へ出さずに納める風が見えますが、これは小刀を差して
おれば出来ないの、自然に鯉口を前に引き出さねばならない事になります。

この横一文字に納める神伝流は、英信流の派の流れを汲むものであります。

・合理的な居合であれ

居合の修行は仮想的に対しての動作である。もし敵を忘れたものであれば刀の舞であつて
武道とは言えない。敵もまた生き物であり、我に向かつて殺意を持っているので如何
様に変化しないとは限らないが、その変化について応ずる練習は不可能である。故にそ
の基本的なものを組み合わせて練習しておいて、変化に応じて実践に役立てようという
のである。実は数年前全剣連で新しい居合の形を作る事が内定したのである。

この話が始めて出てから4年目に決定した。私は3年間反対してきたのである。大正
のはじめ「帝国剣道形」と言われた今の剣道形が出来た。処がそれまでの各流派の形は
何時の間にやらなくなってしまつて現在では大会始めの儀式として行われるのと審査の
為のとなり、審査にも形だけ間違わなければいいとなつたのである。剣道は竹刀打剣道
の方が主体であるから、剣道そのものは滅びないから良いとしても、昔の各流の形には
言い知れない剣道の理念が表されていて奥深く懐かしい限りである。居合道は形のみが
残っていると言つても良い。この形を統一して極めて少数のものとし、木に竹を繋いだ
ものを作るのであつたと思われる。統一の形を作る主張者は

イ 各流派があるので六、七段の審査に困る

ロ 各流派があつて習う者を迷わしめる

ハ 現代剣道と居合は全く別のものであるから、剣道と不離なものでなくてはならない

ニ 極少数の基本的なものでよろしい

等、毎年繰り返されてきたのであるが、自分一人反対しても、世の流れに抗しきれず
賛成せざるを得なかつた。翌年居合道制定委員を作ることとなり、私もその中の一人に
選ばれたのである。左様な訳で自己の考えを纏めておかなければならない羽目に立ち至
つたので、英信流の抜刀から形まで、百何十本と言う業を再検討することになり、稽古
の傍ら、古書も再三引き出して見ざるを得なくなつたのである。

この研究の結果として、飛び道具のなかつた時代、敵のすべての動作に対処する業を
仮想してみるに、真に合理的に無駄のないものであり、どれも取り去る事ことの出来な

い業ばかり盛られていて、この外に加えるべきものもない事に思い至ったのである。古人は整然とした真に立派なものを残して下さったものである。この見事な形のある上に何故新しいものを作らなければならないのかと感じ、この上は現代居合人の80%を有する英信流にいろいろな抜き方を行って、習う者が迷っているからなんとか統一したいものだという結論を得ていたのである。処が幸か不幸か次の京都大会のとき、庄子理事長から「先般の全剣連居合道形制定委員は御破算になったから」と言われたのである。

昭和32年全剣連居合が取り入れてくださったときは、旺盛の剣道団体の中に仲間入りさせていただいたので、剣道に対して定められた規定に従って活動してきたのであるが、目下全剣連は新しい在り方に変わりつつあるらしいが、全剣連の一部として居合道が加えられていることを考え下さって、充分に発展出来るようご考慮を払って頂きたいと願する者である。

話が横道に入りかけたが元に戻して、他流にも同様な事があるだろうと考えますが、これは私には分かりませんので英信流について不合理な抜き方をされているのを見受けますので以下述べてみます。

英信流基本動作即ち正座の居合、大森流の最初に「正面」又は「初発刀」と称せられて、真の抜刀の基礎となるものがある。この抜き方について見るに

イ 抜刀に当って

- ・ 抜くとき柄を押し下げるもの
- ・ 右手を右前に出すもの
- ・ 右手を左前へ突き出して振り回して切りつけるもの
- ・ 右前へ抜いて改めてちょっと戻し、更に改めて力を入れて切りつけるもの
- ・ 右前に抜き放ってから振り出して切るもの

以上の抜き方は「今抜いて切りつけるぞ」と敵に予告している事になる。抜刀は極めて自然であって、敵に気づかれない様にすることが大切であるから、静かに柄頭を切る相手の目標に向けて正面抜くべきでこの方法が、目標の小さい上に隙のない抜き方である。

尚抜くに当って鞘放れまで刃を上にして手首を曲げ肘も下げて引き出し、鞘放れしてから刃を横にかえすのがある。

この抜き方は極めて窮屈な動作で鞘放れまでに鯉口を水平にしておけば、鞘を放たれた刀は既に切るための力が生じているのであるから、右手をかけるとき、左手で刀を少し前へ出しつつ横に向ければ、右手も自然にかけ易いのである。尚小刀があるから左手を少し前へ出さなければ右手はかけられない。

勿論土佐において幕末二派あって一派はこれに近かったが、もっと淡々と抜いていたようである。

ロ 振り上げるに当って

- ・左手をかけるに当って右手で刀を正面に立てて左手をかけ改めて振り上げるもの
- ・振り上げるとき文字通り右手を先ず頭上に送り、刃は自分の左側を大きく振り回して後方に送るもの

この二つは抜きつけてから、切り下ろすまでに大きな間が出来ると同時に、振り回した事になってそのまま切り下ろしたとき斜め切りになり易い。この間をなくする為と素直に切る為に、抜きつけた右手はそのままの位置で柔らかく手首を返して剣尖を額面前方に送りつつ上げる。右手が額前へ来たとき左手はこれを追いつつ柄にかけて頭上に上げる。この様にすれば抜きつけから振り上げるまでは最短距離であるから間が少ない。同時に切り下ろすに当たっても真っ直ぐに切り下ろせるのである。尚、刀を振り上げるに当って進出する時は、刀を右手で上げるその下へ身体を送り打ち下ろせば尚深く切り下せるのである。

ハ 振り上げるとき左ひざを右足近くまで送り、斬り下すに当って右足を大きく踏み出すものと抜きつけた位置から進出しないで斬り下すものがある。

この二つの方法は間合いとの関係で何れも正しいのである。即ち一文字の抜きつけは対座した者のコメカミ又は頸或は互いに抜き合わす拳と一派もあった。コメカミ又は頸であれば進出しなくても切り下ろしが有効であるが、拳に抜きつけた時は大きく出なければ届かない事になる。現代神伝流と称している元の下村派は拳に抜き付けたのである。

ニ 血振の終わった時の右手、剣尖の位置が色々ある

- ・右拳を右に高くし、剣尖は下がったもの
- ・右手を右前に下げ、剣尖も下がったもの
- ・右手は前であっても、剣尖が拳より右に外れているもの

その他色々あるが、刀を水平に物打ち辺りが頭上を越すように刀を廻し、頭上を越すと同時に立てば刀は大体同一平面状を通り右前に投げ出される事になる。(立ち方が早すぎると刀は一度高く上がって振り下ろす事になる)そこで、右拳を正面の45度右前方、身体と腕とも45度開き剣尖も45度下げのようにし、剣尖は拳よりやや内で止めれば残心があり、次の納刀に最も良い位置で、右手は鯉口を握った左拳と水平にすれば、カガトの上があった後ろ足に充分体重をかければ自然体であり納刀も容易である。戦い終わったと言えども、どこまでも残心のあることは武道の本旨である。

ホ 足の踏み替えに就いて

- ・神伝流では血振るいを終えて立ち、改めて足を踏み替えて納める。これに反し無双直伝では血振るいの終わりに後ろ足を送って踏み揃え、反対の足を退いて納める。

土佐に幕末二派あったが、何れも立ったとき踏み揃え、反対の片足を退いて納刀準備をしており、神伝流秘書の中で、初発刀の説明に「右足ヲ踏ミ出シ向ニ抜付ケ打込サテ血震シテ立ツ時前ノ右足ニ踏ミ揃へ右足ヲ引イテ納ル也」とはつきり書かれてある。

この説明は立つ時前の足の踏み揃え、納刀の為に反対の足を引いて体を安定させて納めたものである。

数年前のことであるが神伝流の方から「私等は血振るいして立ってから改めて足を踏み替えて納めるよう御習いしている。何故立ってから踏み替えるのでしょうか。血振りが終わって立てば英信流以下の様に足を踏み替えなくてそのまま納めたらよいと思いますが、何故踏み替えますか」との質問があり「それは私のほうから伺いたい事です」と大笑いした。強いて言えば「敵を仕留めた。然し确实か否かと思うのは人情であり、又之を確認する事も残心である」とすれば血振りしつつ近寄ってみる為に後ろ足を送る、确实に目的を達したから納めるとなれば、踏みそろえた足では具合が悪いから片足を引いて安定な姿勢をして納める。同じ足を往復させるより足を替える事が自然であると説明すれば如何でしょう。

へ 2・3・4の抜刀に当って

2本目は左の敵、3本目は右の敵、4本目は後ろの敵に抜きつけるのであるが、何れも正面に向かって抜きつつ廻って斬るのはまだよいとして、甚だしいのは、切っ先3寸まで真っ直ぐ抜き改めて廻って抜きつけるものまで見受けられる。この抜き方は不合理で、2本目、4本目は左に廻るのであるから、右手を柄にかける時、右膝頭を左ひざに合わせ、抜き始めるときは右手で腰を押し回す様に左に開いて敵に柄頭を向けて抜きつつ体を廻すべきであり、3本目はこれと反対に膝を合わせ、右手は右に向けた抜くべきである。

ト 5本目（陰陽進退）に就いて…神伝流では陰陽進退替え業

動作は坐して正面の敵に抜きつけたが届かなかったので、左足を踏み込んで切り下し、右に開いて納める所へ右斜めから袈裟に切り下されたので、体を退いて外したが足に流れてくるのでこれを受け止め、直ちに踏み込んで切り下すのである。この業は早業でなければならない。理由は最初の抜きつけが届かなければ急いで切り下す必要がある。2回目に切り下されたのを受け止める、受け止めたら敵の刀は生きている、故に変化しない間に先に斬らねばならないから早業を必要とするが始めから終わりまで慌てふためいて早くするのでなく必要に応じて合理的に早くするのである。

この応じ方に就いて考えてみると体を開いて右足の真右に應ずるのが一番安全である。この様にすれば応じが早すぎても大丈夫であるが右足の後ろに應じたとすると、遅ければ無効であるが、早過ぎると足を切られる。タイミングが合えば申し分ない。故に必ず右足の真右に垂直となるよう抜きつけと同様に強く受け止めるべきで、敵の刀は横からではなく斜めから来ることを忘れてはならない。

英信流形で柄に両手をかけて柄頭を左にし或は柄を右に左手を物打峰にかけて正面を受ける事が度々ある。このとき頭の真上に上げれば額を切られるが、額前で确实であると同様である。

次に受け止めてから斬る事を早くする為に、慌てて振り上げ、改めて左膝を着き切り下

ろしているが、何も慌てる必要はない。合理的に早くすればよいのである。即ち受け止めると同時に、右拳の位置を変えずに手首を反して剣尖を後ろ向け刀を水平にする。これと同時に左膝を内に入れて着きつつ体を落として後向いた刀の下に身体を送れば、刀は一度あがって又下がることなく自然に振り上げた体勢になるから、直ちに切り下ろせば極めて早く切り下せるのである。

これは一例に過ぎないが、不用な運動をなくせば、間延びしない自然な動作となれるのである。

《6本目記述なし》

チ 7本目 (介錯＝順刀)

この業は直前に左向きに座して切腹するものを、機を見て首を切る動作で頸が前に落ちて後ろへ倒れない為他流では言われているが英信流では切り離せ、もし残ったら続けてずばりと切り払えと教えられている。

第一動作で抜刀して右肩辺りに抜き構えた刀（下村派・現代の神伝流は刀を立てる）の刃は、直ちに首に向かう体勢で、切腹者を見守っているべきである。

第二動作で、機を見て右足を踏み出して、正面首の高さに切る。

以上述べれば構え、斬った大勢は自然にはっきり出来る筈であるが、中々出来ないのがある。これは誰も見た事もない、実行した事もないから出来ないはずである。然し、出来ない理由は「こうやるものだ」と考える仮想のあり方を考えないからである。この故に足の運びが出来ていない。

リ 9本目 (月影＝勢中刀)

この動作は左向きに座する所へ、右の方から立って斬りかかれたので（一）立ちながら敵の小手に抜きつけて応じ踏み込んで切り下ろすのであるが（二）立ってしまって高い処に応じているもの（三）立ってしまって上から抜き打ちしているものを見受けるのである。

この業では左踵左に開き、右足は真右に踏み出さねば敵のいない処を斬り、又右前に踏み出し敵のいる所を斬れば敵に背を向けて斬らねばならない事になる。この足で抜きつけられれば、次の切り下ろしの為左足を踏み出す時正しく出られないのである。

尚切り下ろす時でなく、振り上げる小手に先に応ずべしと説く方もあるが、これは英信流の「先」の精神を考えたものでよいと思われる。

－奥居合いに就いて2・3述べてみると－

ヌ 立ち業で刀に手をかけて歩き出すものを見受ける

この左手を刀に手をかけたということは平常の形ではなく、鯉口を切ったことを意味す

るもので、いくら「先が居合の大切な事だ」と言っても、始めから手をかけては相手は用心する、この故に両手を下げて平然たる歩行中に両手を同時にかけるべきである。

この刀に手をかけた時は、斬った時であり、斬った時は納め終わったときであると言うのが奥居合のあり方である。ところが一気にパチンと納めないで、居合の格として四分の一は静かに納めて終わる事になったのである。

ル 信夫（夜の太刀）

これは夜の太刀であって、暗夜の動作で覚書に「夜中の試合には我は白きものを着るべくしでの太刀筋よく能見ゆるなり場合（間合いの意）も能よく知るものなり放れ口もなり安し白き肌着杯を着たらば上着を脱ぐべし構えは下段よし敵の足をな薙ぐ心得肝要也或はふいに下段になして敵に倒れたると見せて足をな薙ぐ心得あるべし」とあって夜陰の試合の心得があり、又地獄搜には「刀の身と鞘とを半分抜き掛けて柄を以って一面にまぜ搜すべしコジリに物触るを証あかしに抜きて可突べく」「鞘口三寸斗に切っ先を残し居乍ら静に四方へ廻して探るべし九尺四方何事も知申」とあるが何時の時代から現代のような業が出来たのか不明であるが、現在のものは夜陰正面に出会った敵正面を外して左に進出し、敵の進路上に剣尖を足形を示して誘い、これに切り下し敵を切る動作となっている。（下段になし、倒れると見せかける）は生きており、足をな薙ぐは平常の業として十文字の居合に反するので、真っ向から切る動作となったと考えられる。この剣尖を地に付ける場所と斬り下ろしは歩いてきた線上であるべきであるが、在らぬ所を示したり、切り下ろしたりするものを見受ける。

足の踏み替えのときは左向きになっているので、上体は左に向けて敵の来る方向から遠ざかりつつ右手を右前に伸ばして敵の進路に剣尖をつけた処へ切り下す敵だから、左足は大きく踏み出し右足を大きく踏み込んで元の行進途上の敵を切り下ろすべきである。

ヲ 門入

「門入」とは口伝によると「下げ緒を肩に掛けて太刀を背負って上から切り下ろしを防ぐ用意をして走り込め、右手は小刀に手をかけ打ち下されたときは足をな薙げ」とあり「獅子の洞入り」には太刀を右手で上段後下がりに持ち、左手は小刀を持って入れとある。

なお門を入るときの心得として「門内に殺意を感じた時は、斜めに入れ」とあって門入りと言う業は見当たらないが、現行の業は門外で抜刀して門内の敵を片手突きし、振り返って門外の敵を諸手で切り、再び振り返って門内の敵を切り下す事になっている。処が其の門に横木があつて丁度門の所では斬れない。これも横木のある場合の練習をしておけば横木のないときは自然に出来るからこれを取り入れたものと思われる。

この動作で前を突く動作を見ると殆ど全部の者が見事な敵前旋回をして突いている。詳述すれば（一）左の足の出た時刀に手をかけ（二）右足を踏み出して前に突き（三）左足を踏み出しつつ、右手を大きく右に廻して（四）刀を胸に取り（五）右足を踏み出して前を突く。

これを右足（一）で両手を掛けるや直ちに（４）の体勢になるべく、右手は現在の所から動かないで、体を開きつつ左足を大きく踏み出して腰を送り出せば（素早く体を開き、鯉口は腹に押付ける気持ち）刀はすっぱりと抜けて前方に向かっているので極めて自然に突く体勢になる事から、右足を大きく踏み出して右手を伸ばせば刀は途中で止まることなく最も早く突く事が出来るのである。

奥居合はこの様にして目にも留まらぬ早業であるべきである。

ワ そうまくり 総捲 (五方切)

もうひとつ総捲りといって、正面を受け流し、右から面、左から肩、右から胴、左から腰を払って真っ甲から切り下ろす業がある。

この業も覚書によると、総捲り形十縦横無尽に打ち振りテ敵をマクリ斬る也。故に形十と有也。常に稽古の格にはく抜き打ちに斬りそれより首肩腰脛と段々と切り下げ又冠り打ち込む也とあって初太刀は右足前で斜めに抜き打ちに斜面を切ったものである。（これと同様に大森流付け込みも現在は受け流して面を斬っているが、覚書には初太刀は正面に抜き打ちして、二の太刀は切り下ろす事になっていて、昔は受け流す動作はなく先の業だけであったものが後世受け流しに変わったようである）に就いて見ると刀の意思に反して振り回している者が多い。言葉を変えると刀と自分の身体とが別々に動いて、いかにもごちなく見受けられる。右から斜面の時はよいが、左から肩を切った刀が止まるとき、足を狭く腰を落として体も同時に止まればよいが。この辺から乱れ始めて右から胴の時は手と足は別々に止まる。次に腰を腰を切り払うに至っては、刀は大きく前に動きたくて仕方がないにもかかわらず（後足を送って体を前へ出してやらないから）刀の意思に反して充分向こうに伸びないので極めてギコチなくなる。この時刀が思い切って延びる為には、後足を前足の近くまで進めてやる（踏みつけない）と刀の意思通り大きく前へ出て斬る事が出来る。この刀は止まる事無く大きく右へ廻って後に来る。この時止めなかった後足を大きく退いて踏む。同時に前足も浮かせて退き、（止めないで）両手を頭上に上げると楽々と振り上げられて切り下ろす体勢となるので、刀は止まる事無く自然に伸び伸びと速やかに斬り下せて刀の自由を束縛する事がないと思考するものである。要は刀を自由に使うと同時に刀にも使われて刀と自分の身体とが互いに仲良く働き、其の間に要所要所に斬る為の力を加えてやればよいと考えるものである。

英信流を修行される方は基礎である正座の業を身に着くまで、静に修めた上は英信流、奥居合、形と奥深く研究して其の抜き方納め方、間合い、を考えた居合をして頂きたい。

奥居合の速くと言うのは確実な業を合理的に速くと言う意味であって、中途半端な業でもよいから早く行えと言うのではない。古人の覚書に「誰でもいざと言うときには平常心であり得ないものであるから無意識に敵に応じ得るまでの修行を積み」とある。 完